伊吹町文化財調査報告書第16集

上平寺城跡遺跡群

駒繋跡・杉本坊墓地

こまつなぎあと　すぎもとぼうぼち

発掘調査報告書

2002. 3

滋賀県坂田郡
伊吹町教育委員会

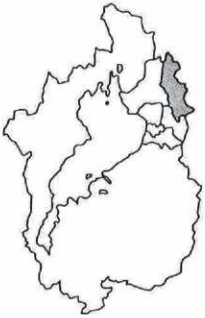
伊吹町文化財調査報告書第16集

上平寺城跡遺跡群

駒繋跡・杉本坊墓地

こまつなぎあと　すぎもとぼうぼち

発掘調査報告書



2002. 3

滋賀県坂田郡
伊吹町教育委員会

序

近江と美濃の国境にそびえる伊吹山は、滋賀県の各地からその秀麗な山なみを望むことができます。さらに岐阜・愛知の両県からは、とくに秋晴れの素晴らしい日に、濃尾平野の西に独立する神々しい姿をはるかに望むことができます。

この山は、古くから神の住む山として知られ、山頂で採集される縄文時代の石鏃から、原始信仰の中ですでに神格化されていたことがうかがえます。そして、古代山岳信仰が密教と結びついて山岳仏教の聖地となり、山腹には多くの山岳寺院が創建され展開していきます。今でも弥高寺跡など、往時の姿を彷彿させる雄大な寺院遺跡を見ることができます。

さて、近年の調査で、この伊吹山の南麓一帯に、北近江の守護大名・京極氏に関連する遺跡群が良好に残っていることがわかってきました。鎌倉時代から近江の国の主役であった近江源氏・佐々木氏。その庶流でありながら、愛知川以北の北近江を支配した佐々木京極氏の本拠地・上平寺城館です。

京極家15代の高清が、一族の内紛を収めて、新たに整備し、構築した遺跡群は、全国屈指の戦国期庭園を伴う京極氏館、背後の巨大城郭・上平寺城、家臣屋敷が整然と並ぶ高殿地区、そして、水田の下に眠っていることが判明した城下町遺構などです。

今回は、家臣屋敷群の北に位置する「駒繋」跡および杉本坊の墓地の発掘調査の内容を報告します。この場所は、城下町の西側を防御する地点に当ります。また、杉本坊は、城館に先行する寺院・上平寺の法灯を今日に伝えます。わずかな調査範囲であるため、充分な成果は得られませんでしたが、今後も、調査を積み重ねて京極氏遺跡群の全容に迫っていきたいと思います。

最後になりましたが、調査に際して、地元上平寺区の皆様、調査に参加いただいた地元の皆さん、調査および出土品の整理に際し、ご指導を賜りました関係諸機関・各位に、あらためて厚くお礼申し上げます。

平成14年３月

伊吹町教育委員会
教育長　松　嶌　膽　龍

例　　言

1．本書は、文化庁・滋賀県の補助を受け、国庫補助事業として実施した、滋賀県坂田郡伊吹町大字上平寺周辺に所在する上平寺城跡遺跡群のうち、家臣屋敷跡が集中する「高殿地区（上平寺南館遺跡）」の駒繋跡と杉本坊墓地の発掘調査報告書である。「駒繋」の名称は『上平寺城絵図』（伊吹町役場蔵）の記載による。

2．本調査は、上平寺区集団墓地の移転工事に伴うもので、滋賀県教育委員会文化財保護課の指導を受け、伊吹町教育委員会が実施した。

3．駒繋跡の発掘調査は、平成11年度に実施した。杉本坊墓地の発掘調査は平成12年度に実施した。ともに平成13年度に整理作業と報告書の作成を行った。

4．現地調査は、伊吹町教育委員会生涯学習課主任・高橋順之が担当した。なお、調査体制は下記のとおりである。

調査主体　伊吹町教育委員会　教育長　石河竹二郎（～平成12年10月）
松嶌　膽龍（平成12年11月～）

調査事務局　伊吹町教育委員会　生涯学習課

課　長　堀内　安夫（平成11年度）　伊富貴孝司（12年度）　山崎　完一（13年度）

課長補佐　尾木義比己（平成11年度）　高橋　兵太（12・13年度）

係　長　山田　英喜（平成11年度）　大澤　信悟（12・13年度）

主　事　石河　輝男（平成11・12年度）伊藤　彰浩（13年度）

調査作業員

滝上庄司　三宅美一　多賀　兼　滝上光子　滝上美代子　谷口朋子　丸本比佐乃
的場育代　山本直人　田中真二　堤　光弘　安田郁子

5．遺物の整理・実測等に関しては、上記作業員のうち的場、安田でおこなった。

6．本書は高橋順之が執筆・編集した。

7．発掘調査および報告書の作成にあたって、次の方々からご指導・ご助言・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。（敬称略・順不同）

阿刀弘史　内田保之　桂田峰男　土井一行　中井　均　福永円澄　宮崎幹也

8．調査記録および出土品は、伊吹町教育委員会で保管している。

目　　次

序
凡例

第1部　駒繋跡
第1章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 2
第2章　発掘調査の経過 …… 4
第3章　発掘調査の結果 …… 5
第4章　まとめにかえて …… 10

第2部　杉本坊墓地
第1章　遺跡の歴史的環境 …… 11
第2章　発掘調査の経過 …… 15
第3章　発掘調査の結果 …… 16
第4章　墓　　石 …… 20
第5章　まとめにかえて …… 22

挿　図　目　次

第1部
第1図　遺跡位置図 …… 1
第2図　調査区位置図 …… 3
第3図　検出遺構平面図 …… 4
第4図　土層断面図 …… 7
第5図　土師皿一括出土遺構実測図 …… 7
第6図　出土遺物実測図（1） …… 8
第7図　出土遺物実測図（2） …… 9

第2部
第8図　伊吹山麓の寺院関連遺跡位置図 …… 12
第9図　調査前墓石配置平面図 …… 14
第10図　調査区平面図（上）土層断面図（下） …… 15
第11図　SXⅠ・SX2実測図 …… 17
第12図　出土遺物実測図 …… 19
第13図　杉本坊墓地墓石変遷図 …… 21

図 版 目 次

第１部

図版１　調査地・調査前・作業風景

図版２　調査区全景・Ｔ１・Ｔ２

図版３　Ｔ３・Ｔ１南端土層断面・Ｔ２南端土層断面

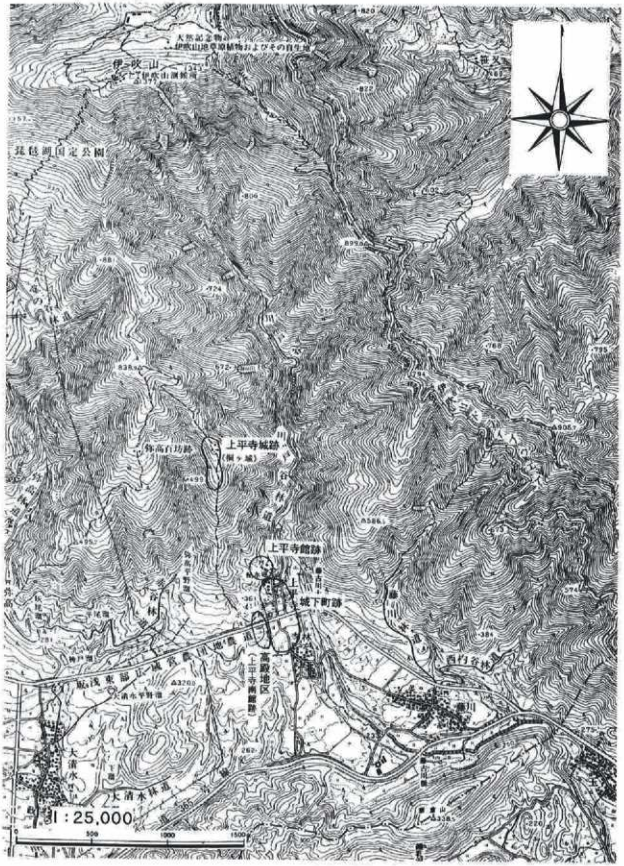
図版４　土器集積遺構・出土遺物

第２部

図版５　調査前

図版６　ＳＸ１・ＳＸ２

図版７　墓石


天然記念物
伊吹山地草原植物およびその自生地
伊吹山
琵琶湖国定公園
上平寺城跡
(例ヶ城)
上平寺館跡
上平寺城下町跡
高殿地区
(上平寺南麓跡)
大清水
大清水林道
1:25,000
500
1000
1500

第1図　遺跡位置図

第1部　駒　繋　跡

第1章　遺跡の位置と歴史的環境

坂田郡伊吹町は滋賀県の北東端に位置し、東は岐阜県不破郡関ケ原町・同県揖斐郡春日村、北は揖斐郡坂内村に接する。西と南は滋賀県東浅井郡浅井町と坂田郡山東町に接する。滋賀県の最高峰伊吹山（標高1377m）の山麓と、伊吹山地北部に端を発する姉川の峡谷部に広がる農山村である。

この地域は、東日本と西日本の境界にあたり、その境界に伊吹山がそびえる。古代の幹線道である東山道（中山道）や北国街道が通り、今日では東海道新幹線や名神高速道路などが集中する交通の要衝である。

今回報告する上平寺城跡遺跡群は、この伊吹山南麓地域に展開する。この遺跡群は、中世に北近江を支配した京極氏に関連するもので、京極高清が15世紀末から16世紀初頭に整備したものである。遺跡群を構成するのは、京極氏の館や庭園、大津氏・隠岐氏の屋敷が並ぶ「上平寺館跡」、若宮氏・加州氏などの屋敷が区画されている高殿地区（遺跡名「上平寺南館遺跡」）、戦時の詰めの城「上平寺城跡」（苅安城・桐ヶ城）などの城館遺跡と、これらに伴う城下町跡や長福寺などの寺院跡である。さらに、上平寺城跡の西側尾根上に位置する古代山岳寺院「弥高寺跡」も戦国期に京極氏が城郭として利用している。

この上平寺城跡遺跡群は、主に京極高清・高吉（高佳・高慶）親子の本拠地と考えられるが、さらに周辺に視野を広げると、ここから直線距離で5km南には、京極家の菩提寺・清滝寺徳源院や柏原館跡（いずれも山東町清滝）がある。京極家初代氏信以来の本拠地である。また、伊吹山頂から西に延びる尾根上には、京極氏の城館といわれる太平寺城跡がある。このように伊吹山麓は、京極氏の拠点として重要な地域であった。

さて、上平寺館や高殿地区・城下町は、伊吹山南麓斜面を駆け下る藤古川が作り出した扇状地の右岸扇頂部付近にあり、東側は藤古川の急峻な谷、西側は高殿地区がある尾根と、『上平寺城絵図』に「要害谷」と記されている天然の要害によって守られている。『上平寺城絵図』は、近世になって現地の遺構を忠実に描き、伝承を加味して作成されたと考えられる信憑性の高い資料で、山城跡や館跡の現存遺構や道路、地割などが絵図とかなり合致している。これによると、館の前面には「内堀」があり、これより南が城下で「諸士屋敷」。「一之御門」をはさんで「町屋敷」となる。町屋敷の南には「外堀」が東西に走り、外堀の外側は「市店民屋」になる。

今回発掘調査を行った「駒繋跡」と「杉本坊墓地」は、城下の西側の尾根上に家臣団屋敷が配置されている高殿地区の北端に位置している（第2図）。平成10・11年度に行った地形測量では、約60m四方の屋敷跡など方形に地割された屋敷跡を8区画前後確認した。『絵図』の屋敷区画には、尾根の中央を境にして西側に「若宮」「加州」「多賀」、東側に「浅見」「黒田」「西野」の名称が記載されている。いずれも北近江各地を拠点とする一族及び有力被官である。

『絵図』に「駒繋」の記載がある削平地アは、若宮氏屋敷と推定される区画イの北側にある楕円形の削平地で、若宮氏屋敷との間には土塁と堀切が設けられている。イとの比高差は約5

m、堀底からは約6mの高低差を持つ。この堀切は城下への西からの入り口になっており、駒繋跡と若宮氏屋敷が、この道の防御上重要な役割を担っており、さらに、高殿地区全体が、上平寺館と城下の防御拠点として家臣屋敷が配置されたと考えられる。

第2部で報告する「杉本坊墓地」は、駒繋跡の東側に位置する小さな削平地にある。駒繋より約5m低い。

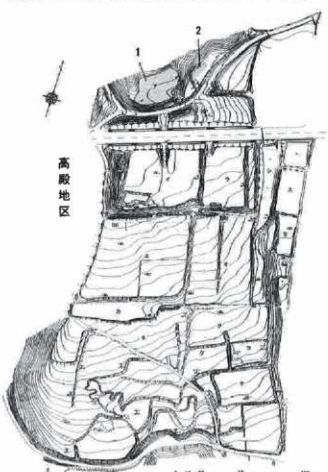
京極氏の歴史については、『上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅲ』(2002年　伊吹町文化財調査報告書第17集）で概略を記したが、簡単にまとめてみたい。

京極氏は、仁治二年（1241）に近江守護佐々木信綱が4人の子に近江の所領を分配し、四男氏信に愛知川以北の北近江六郡を与えたことに始まる。氏信は鎌倉御家人であるとともに、検非違使として御所や院の警護にも当たっていた在京御家人である。

南北朝期の当主は高氏（道誉）である。建武三年（1336）京極氏としてはじめて守護に任ぜられ、宗家六角氏と肩を並べると、幕府の有力者として近江でもしだいに六角氏を圧倒する。応仁の乱で東軍細川方に属した京極持清は、六角氏の居城・観音寺城を攻め、近江国内において戦乱が繰り広げられる。しかし、持清とその子勝秀の死後、京極家は分裂し、高清と政経の対立に守護代多賀氏の内紛が絡み混乱状態が続く。

その後、高清は、明応八年（1499）に政経の子材宗を破り、永正二年（1505）に日光寺（近江町）で和睦して、有力家臣上坂氏の助力を得て北近江を統一する。この時の拠点が、今回報告する上平寺館である。しかし、大永三年（1523）この上坂氏の専横を打倒するために、浅見・浅井・三田村・堀などの国人が上平寺を攻め、高清・高慶親子を追放して高延（高広）を擁立する。ここで再び、高延・高慶兄弟の対立により京極家は分裂し、高広が天文末年まで坂田郡南部でかろうじて政権を維持するものの、北近江では被官であった浅井氏が戦国大名への道を歩み始める。

織豊期から江戸時代の京極氏は、高慶（吉）の系統から出た高次・高知兄弟によって再興され、江戸時代には丸亀藩（香川県）など5つの大名家（宮津藩は途中で旗本になる）で明治維新を迎える。



第2図　調査区位置図（1駒繋跡　2杉本坊墓地）

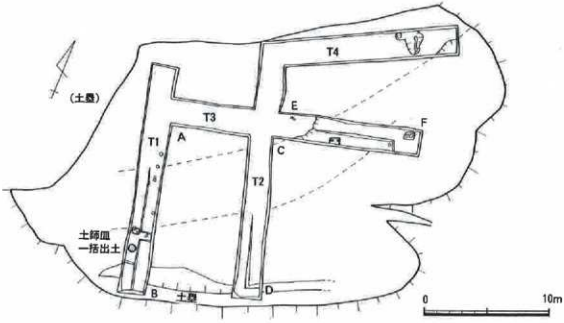
第２章　発掘調査の経過

今回の調査は、上平寺区集団墓地の移転工事に伴い実施した。上平寺区の墓地は、集落西側の谷の中にあり、周辺はうっそうとした杉林で日当たりはあまり良くない。また、谷部にあるために降水量の多い時期にはたびたび出水する。周辺には数軒の墓石が散在しており、これらを集約する形で、今回新しい集団墓地が計画され、その候補地に「駒繋跡」が選ばれた。また、一段下にある杉本坊墓地も同じ位置にまとめるということで計画立案された。

そのため、地元区と滋賀県教育委員会および町教育委員会で協議をすすめた。周辺はすでに開発が進んでおり、駒繋跡と南に対峙する若宮屋敷跡（推定）の間には、昭和40年代後半から50年代に建設された町道藤川相撲庭線が通っており、若宮屋敷の北側を破壊していた。また、平成９年には、若宮屋敷の北端にわずかに残っていた土塁と堀切が、町道川戸線により改変され、かろうじて駒繋跡の南壁面のみが現状のまま残されている。今回の協議では、駒繋跡の西と南にある土塁を現状で保存し、平坦面もできる限り現状のレベルを維持することで遺跡に及ぼす影響を少なくした。調査は、曲輪内に複数のトレンチを設定して、地下遺構を確認することを目的におこなった。

現状は山林で、木を避けて東西および南北方向にそれぞれ２本づつのトレンチを設定した。調査面積は約142㎡である。調査は平成11年８月25日から11月29日の期間に実施した。

発掘調査は、人力でおこない遺構検出面直上まで掘り下げたあと、作業員による遺構の検出と遺構内の掘削、遺物の検出をおこない、写真撮影と実測図の作成により記録した。調査終了後、埋め戻しをおこなった。



第３図　検出遺構平面図

第３章　発掘調査の結果

「駒繋」と呼ばれる削平地は、東西最大幅36m、南北22mの楕円形をしている。北は伊吹山から伸びる尾根になり、南側は若宮氏屋敷との間の堀切道である。東側の一段下には杉本坊墓地がある削平地で、西側は、現在埋め立てられているが、もとは深い谷であった。

平坦面の高さは約313mである。削平地の南側と西側には土塁がある。南側の土塁は低く、最も高い部分で約28cm、東に行くにしたがい消える。西側の土塁は、この削平地を構築する際に削り残したものと考えられ、長さ約15m、幅約10m、付け根部の高さ約４mを測る。

調査トレンチの配置は第３図に示すとおりである。立木を避けて調査区を設定したために、平行して設けられなかった個所もある。各トレンチの番号は、南北に設けたトレンチの西側がＴ１、中央がＴ２、東西トレンチの中央がＴ３、北側がＴ４とした。

以下、それぞれのトレンチごとにその概要について報告する。出土遺物については、最後に一括して取り上げる。

Ｔ１

１）層　序（第４図）

Ｔ１は、山手で西側の土塁の落ち際と接し、南端では低い土塁を切る形で設定した。幅約２m、長さ約18mを測る。

土層の堆積は、山側では約10～15cmの表土をはぐと固く締まった明黄色土となり、これが遺構面（地山）と考えられた。遺構面で土師皿の小片が出土している。この層序が約８m南まで続き、ここからは約20～25cmの表土の下に黒色土が堆積していた。地山と考えられる明黄色土層はここから傾斜して落ちる。土層断面図は、さらに４m南でより複雑になる。黄混じり茶色土・黄色土・茶褐色土・明黄色土・茶色土・黒色土・茶色土などが約10cm幅で堆積する土層が現れ、トレンチ南端まで続く。

トレンチ南側での層序は、約20cmの表土の下に黄まじりの茶色土、茶褐色土が10cm程度堆積している。茶色土はトレンチ南端の約１m手前から土塁状に盛り上がっている。茶褐色土の下は、明黄色土、黒色土、黒混じり明黄色土、茶色土、茶混じり黄色土などが、それぞれ10cm前後の厚みで約40cm堆積していた。この層は、ここを削平地として整地したときのものと考えられる。さらに、この下にやわらかい黒色土が約70cmの厚さで堆積している。この黒色土層の直上で、土師皿が一括で出土した。また、黒色上中からも土師皿の小片が出土している。黒色土の下が、トレンチ北側で検出した明黄色土層となる。

この層序から、もともと明黄色土の地山面に黒色土が堆積していた尾根をカットして、削平地を整地していることが考えられる。

２）遺　構

遺構は、トレンチの中央付近でわずかにピットを５基を確認した。いずれも落ち込み状の浅いもので遺物などの出土はなかった。また、トレンチ南側の黒色土直上で土師皿10枚以上がまとまって出土した。２枚を除いて細かく割れているものの、２～３枚が重なっているものも見られた。一括して置かれたか、投棄されたものと考えられる。

T2

1）層　序

中央付近で南北に設定したT2は、南端で低い土塁を切る。幅約2m、長さ約20mを測る。

土層の堆積は、山側ではT1同様に約10～15cmの表土をはぐと固く締まった明黄色土となり、これが遺構面（地山）と考えられた。この層序が約7m南まで続き、ここからは約15～20cmの表土の下に黒色土が堆積していた。さらに6m南で、地山と考えられる明黄色土層が傾斜して落ち、層序が複雑になる。暗茶色土・黄色土・黄色礫土・黄色粘質土・黄混じり黒色土・黄色土・黒色土・黒混じり黄色土・黄色土・黒色土・暗黄色土などが約6～20cm幅で堆積する土層が現れ、トレンチ南端まで続く。この層は、削平地を作る際の整地上層であろう。

2）遺　構

T2では、北から順に明黄色土・黒色土・暗茶褐色土が遺構面を形成していると考えられるが、ピット等の遺構は検出されなかった。

T3

1）層　序

東西に設定したトレンチ3は、幅約2m、長さ約19mを測る。T1に接する西側で表土の下に明黄色土（遺構面）となり、T2と交差する地点から、表土の下に黒色土が約40cm堆積する。明黄色土層はT2と交わるところから約3m西側で落ち込む。トレンチの東側では、約30cmの表土を剥ぐと黄色土および黒混じり茶色土の整地土層となる。

2）遺　構

T3でもピット等の遺構は検出されなかった。東側で、20～30cm前後の扁平な石を検出し、礎石かと思われたが、周辺を試掘したところ並ぶような石は検出されなかった。遺物は明黄色土直上で土師皿や天目茶碗の小片が出土し、黒色土中でも集中して出土する個所があった。

T4

1）層　序

山側で東西に設定したトレンチで、幅約2m、長さ約14mを測る。ほぼ全面で約15cmの表土の下で明黄色土を検出した。わずかに東端のコーナーで明黄色土層の落ち込みを検出し、黒色土が堆積していた。

2）遺　構

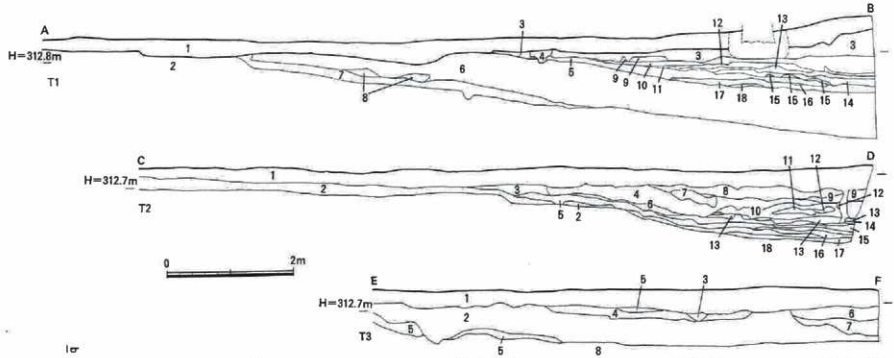
東側で不整形の土坑SK1を検出したのみである。深さは約42cmを測る。

出土遺物（第6・7図）

出土遺物には、土師皿、天目茶碗片を含む陶器、炭、人骨などがある。このうち陶器片はわずか5点で、出土品のほとんどを土師皿が占める。このうち図化できたものは65点あるる。

土師皿は、ほとんどが密な胎土をもち、焼成は良好である。色調は白茶色を呈するものが多い。

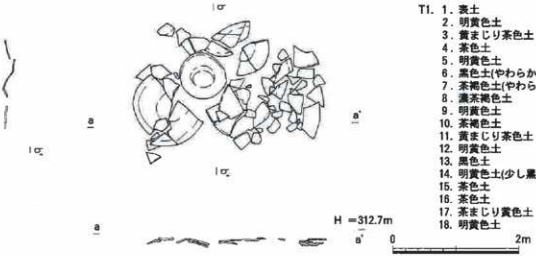
1～25は、T1の黒色土層直上で出土した一括資料である。口径により仮分類すると、1～



T1. 1．表土
2．明黄色土
3．黄まじり茶色土
4．茶色土
5．明黄色土
6．黒色土(やわらかい)(焼石入る)
7．茶褐色土(やわらかい)
8．濃茶褐色土
9．明黄色土
10．茶褐色土
11．黄まじり茶色土
12．明黄色土
13．黒色土
14．明黄色土(少し黒土まじり)
15．茶色土
16．茶色土
17．茶まじり黄色土
18．明黄色土

T2. 1．表土
2．黒色土
3．茶色土
4．黄色土粘質
5．黒まじり黄色土
6．黒色土
7．黄色礫土
8．暗黄色土
9．黄色土
10．灰まじり黒色土
11．黄色土
12．黄色土
13．黒まじり黄色土
14．黒色土
15．黄色土
16．黄色土
17．暗黄色土
18．明黄色土

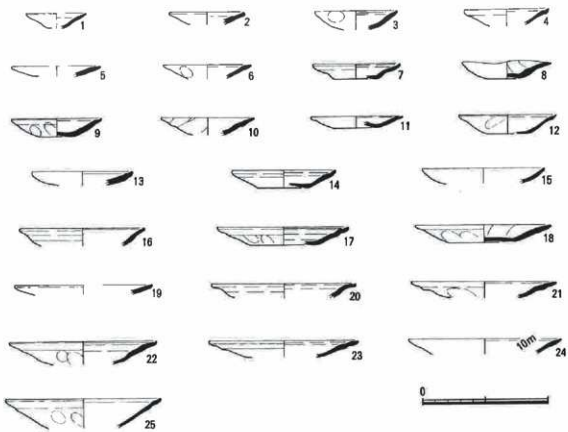
T3. 1．表土
2．黒色土
3．暗茶色土
4．黄色土
5．黄色土地山
6．黄色土
7．黒まじり黄色土
8．明黄色土



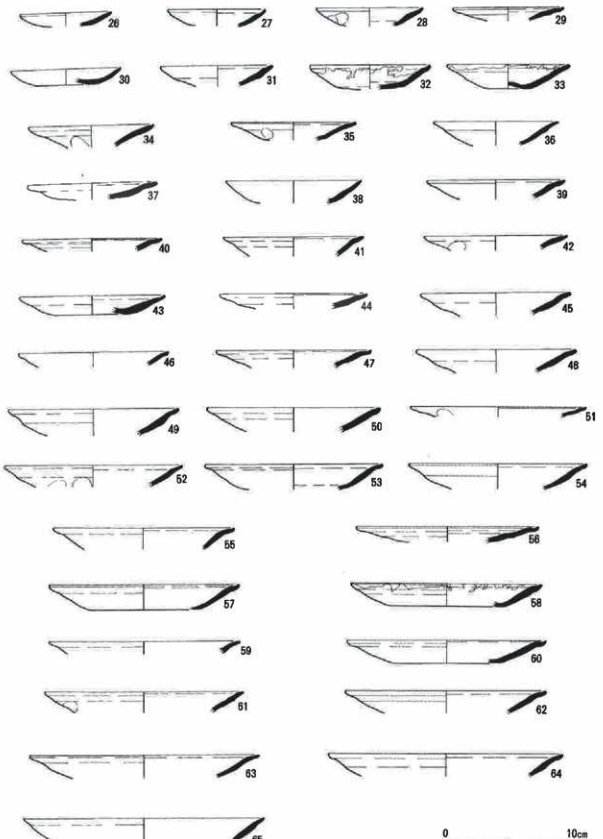
第４図　土層断面図　　第５図　土師皿一括投棄遺構実測図

14は口径が4.8～8.3cmの小型品。14～25は、口径9.5～12.4cmで中型品である。1はほぼ完形で出土した。成形が粗雑で、口縁部は波打っている。底部と体部内面に指ナデによる凹線が残る。7は口縁端部をわずかに上へつまみ出す。14も同様の器形である。21は口縁部を強くなでてわずかに外反させている。中型品の多くにこの作業が施されている。体部外面には指押え痕が残る。一括資料の中にタール痕がついたものはない。

26～65は、その他、T1・T2・T3から出土した土師皿である。T4では遺物が出土していない。26～31は、口径7.4～9.0cmの小型品で、7cm代が中心である。小型品は作りが粗雑で、薄手のものが多い。内面は比較的平滑に仕上げているが、体部外面には指頭圧痕が明瞭に残る。32～48は口径9.5～12.8cmの中型品で、10cm前後と11cm代に中心がある。49～65が口径13.6～19.0cmの大型品で、14cm代が比較的多い。中大型品は、口縁部を横ナデにより外反させ、端部先端をわずかに摘み上げるものが多い。ほとんどが口縁部の破片で、底部の状況はわからない。32・33は口縁部端部の内外にタールが付着している。灯明皿として使用されたものであろう。



第6図　出土遺物実測図（1）



第７図　出土遺物実測図（２）

第４章　まとめにかえて

『絵図』に「駒繋」と記載される削平地でおこなった今回の調査では、その内容や性格を物語るような明瞭な遺構は出土しなかった。しかし、土層断面の観察から、この削平地が伊吹山から延びる尾根をカットして造成していることが確認できた。山側で見られた明黄色土の遺構面は、もともとの地山を削ってあらわれたものであり、中間付近の遺構面・黒色土層は、もとは地山の上に堆積していた表土層の可能性がある。山側をカットして生じた土を盛り上げて整地したのが南側の複雑な土層であろう。

おそらく、「駒繋」に続く堀切道や、土塁囲いの高殿地区の屋敷跡も、この時の土木工事で造成されたものと考えられる。

では、その時期はいつか。この地域でこれほど大規模な工事をおこなう必要があり、かつ、おこないうる力を持っていたのは、上平寺に城館を整備した京極氏しか考えられない。これを物語るのが、Ｔ１の南側で検出した土師皿の一括出土遺構であろう。もとの尾根地表面と考えられる黒色土の上に配置または投棄したような状態で出土した土師皿は、まさに京極氏時代に当る15世紀末から16世紀前半期の遺物である。この遺構は、上地造成に伴う何らかの儀式に使用された可能性も考えられる。

さて、明瞭な遺構が確認されなかった当該地ではあるが、その性格を考えるうえで手がかりになるのは「駒繋」という記載である。今回の報告では、字の読みから一応「コマツナギ」としたが、地元では「駒繋」という漢字を連想させるような名称は伝わっていない。地元では「カイコザンマイ」と呼ばれていた。ただし、この名称についても由来についてははっきりしない。確かに養蚕は、伊吹山麓では農業に次ぐ主要産業であった。「サンマイ」は「三昧」で墓地を表す。養蚕業にかかわる特殊な場所であった可能性も考えられる。

「駒繋」に戻すと、マメ科の植物コマツナギがある。７～９月頃に野原や道端で萩のような花を咲かせる鮮やかな花である。親鸞上人が馬を繋いだという故事にちなむ命名で、馬が繋げるほど丈夫な茎をもつ。城郭用語としての「駒繋」は他に類例を知らないが、各地に駒繋を冠した神社や名勝があり、多くは著名な武将の伝説を持つ。管見に触れただけでも、源頼朝が境内の松に愛馬を繋いだ駒繋神社（東京都）や義経伝説の駒繋神社（岩手県）、畠山重忠・源義家の駒繋石（東京都・埼玉県）、藤原純友・木曽義仲・太田道灌の駒繋ぎ松（愛媛県・富山県・東京都）、源義経・最上義光の駒繋の桜（長野県・山形県）などがあった。

これらを見ると上平寺の「駒繋」も馬に関連する地名であり、城下の馬を留め置く場所であった可能性などが考えられる。明瞭な遺構が検出されなかったのは、仮設的な施設であったためかもしれない。

いずれにしても、京極氏が今回の調査地周辺で大規模な土地造成をおこない、城下の西の防御性を高めていたことが伺えた貴重な調査となった。

第2部　杉本坊墓地

第1章　遺跡の歴史的環境

杉本坊墓地は、第1部で報告した駒繋跡の東側1段下の削平地に位置している。駒繋跡との比高差は5mである。南側を東西に走る町道川戸線の改修までは約10m×35mあったが、掘削されて約10m×20mの小規模な削平地になっている。墓地はこの削平地の山手にへばりつくように並んでおり、卵塔・板碑・一石五輪塔・自然石などが混在している江戸時代の寺院墓地である。

杉本坊は坂田郡伊吹町上平寺194番地にある、現在は、地区の集会所になっており、その中に聖壇を設けて諸仏を祀る(法人号は杉本寺)。真言宗神照寺（長浜市）の末寺である。

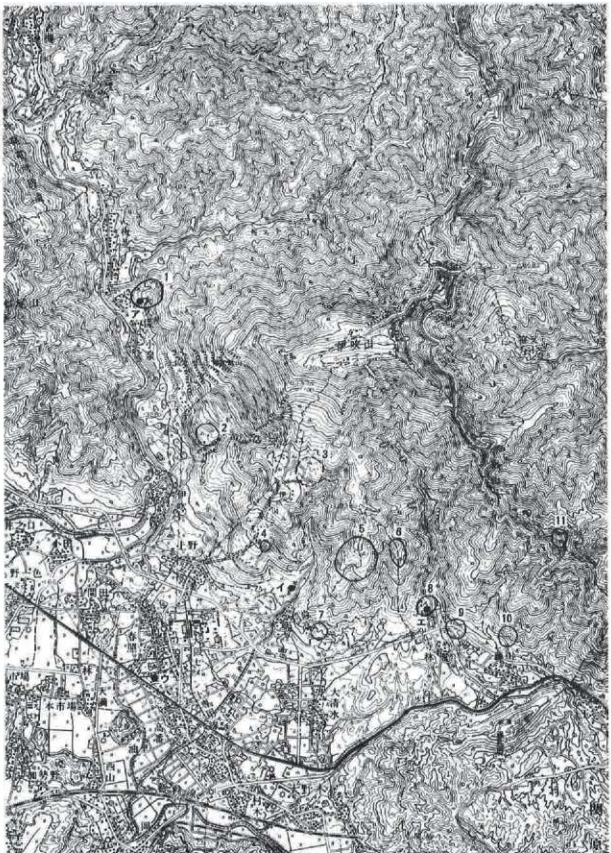
さて、駒繋跡や杉本坊墓地が属する「上平寺城跡遺跡群」は、守護館・山城・城下町がセットで良好に残る中世城館群として認識されているが、この地には、先行して寺院・上平寺（大谷寺）があったと考えられる。杉本坊はもともと上平寺の一坊であったが、次第に一山衰退して、唯一法灯を今に伝える寺院である。

ここでは、寺院・上平寺を中心に上平寺集落周辺の寺院遺跡についてふれてみたい。京極高清が整備する以前のこの地域のようす、上平寺城館が存在した同時期の寺院のあり方、城館廃絶後の上平寺と杉本坊についてみていきたい(第8図)。

上平寺集落背後にある上平寺城跡（桐ヶ城跡）の西側尾根上標高約740mに弥高寺跡がある。この寺は役行者の開山、泰澄大師の入山で一精舎が立てられたことに始まると伝えられている伊吹山寺の中心的寺院である。現在でも伊吹山中腹に百近くの坊跡が扇状に展開しており、典型的な山岳密教寺院跡として滋賀県の史跡に指定されている。現在は、山麓の悉地院が法灯を守っている。さらに弥高寺の西隣の尾根上（伊吹山二合目）には、松尾童子開基の松尾寺がある。

俗に伊吹山四ヶ寺とよばれるのは、弥高寺・太平寺・観音寺・長尾寺で、このうち観音寺は、正元年中（1259～1260）に現在の山東町朝日に移ったと伝えられている。伊吹山中の故地は明確ではないが、一説には悉地院の東にある観音山がそれであると伝えられているし、伊吹山三合目の通称「桑の本」がそうであるとも言う。

眼を上平寺の東側に転じると、伊吹山寺の建立と前後して創建されたと伝えられる暖水寺跡の遺構が残っている。この寺は、永正年間に兵火で焼失したと伝えられ、地元では暖水三十六坊と言われている。正式名称は龍泉寺で、現在は教覚院（真言宗豊山派：悉地院末寺）のみが残っている。また、上平寺集落と藤古川を挟んだ対岸に長福寺跡がある。河岸段丘の一番高いところに本坊を置き、中央の通路を挟んで左右に整然と坊を配置している。佐々木氏が四家に分かれた際、大原氏を興した重綱が建立したと伝えられているが、文書からの確証はない。この寺院は、『上平寺城絵図』には「舊跡」として描かれており、上平寺城館と同時期には存在していなかった可能性がある。享禄二年（1529）京極高広の奉行人山田清氏と大津清忠の連署で長福寺に与えられた文書には「如元上平江可令帰寺之由」とあり、もともと上平（寺）の地にあった長福寺が、何らかの理由で離れていて、上平寺館廃絶後帰還を認められたことが伺え



1．長尾寺跡　2．太平寺跡　3．観音寺跡(推定)　4．松尾寺　5．弥高寺跡
6．上平寺城跡　7．平尾寺跡　8．上平寺館跡　9．長福寺跡　10．暖水寺跡
11．白山寺跡　ア．惣持寺　イ．悉地院　ウ．太平観音堂　エ．杉本坊

第8図　伊吹山麓の寺院関連遺跡位置図

る。『伊吹町史』では、もともと長福寺が上平寺一山の一寺院であっが、現在見られる広大な寺坊跡から、大原重綱が上平寺から独立させて建立したものと推定されている。

そのほか、周辺には平尾寺・白山寺など、詳細が不明な寺院遺跡がある。このように、伊吹山の尾根上に点在する寺院跡群からは、山岳仏教華やかなりし頃の繁栄をしのぶことができる。

さて、寺院・上平寺は、神護景雲年間（767～769）に加賀白山の泰澄大師が創建したと伝えられている。伊吹山中に展開した弥高寺などと同様、伊吹山寺のひとつに数えられる寺院である。『改訂近江国坂田郡志』によると、古くは大谷寺と称し、後に上平寺に改めたという。上平寺創建の位置については、『伊吹町史』のなかで、現在の上平寺城跡（桐ヶ城跡）を妥当としているが、上平寺集落一帯とも述べられている。確かに、伊吹山寺がすべて伊吹山中腹にあることを考えると、標高約690mの城跡が妥当であろう。しかし一方、上平寺地先には「大谷」「上平」という大谷寺や上平寺を連想させる小字名がある。「大谷」は集落北西の尾根を指し、現状は山林で寺院跡のような遺構は見られない。周辺には「覚所谷」「大門西」「大門東」「大門尻」などの寺院関連とも考えられる地名が隣接している。一方、「上平」は、上平寺地区の南に接する大字藤川の小字名である。『絵図』の外堀から外の「市店民屋」の一部を指す。先の長福寺宛の文書で「上平」への帰還に触れたものがあったが、本来はもっと広い地域―上平寺集落一帯―を指す地名とも考えられる。上平寺館を「上平館」と記す文書もある。

永正年間（1504～）京極高清が上平寺館を整備したあと、上平寺も城主高清の信仰を受けて隆盛に向ったと考えられるが、当時、守護権力と寺院が、ひとつの地域の中でどのように存在していたのかを伺う資料は見当たらない。『上平寺城絵図』で寺院を表す記載には、京極氏の館である「御屋形」の上段に大きく描かれた「本堂」がある。脇には「伊吹大権現」の社殿と朱の鳥居を描く。絵図で見る限り京極氏の上平寺館は、本堂をもっとも高台にいただいた特殊な形態を持っていたことを伺わせる。

本堂は、縁を回した3間×2間の建物として描かれている。絵図の中の建物描写はこの2棟だけであり、絵図が作成された江戸初期には現存していた可能性が高い。元和二年（1616）に江戸幕府が上平寺塔頭の密蔵院に宛てた掟書に次のようなものがある。

「　掟　　上平寺之事

一、本堂并鎮守社支配之事　附り境内可為用事也

（中略）

一、御廟所拝礼御供養読経可致勤仕事（以下略）」

この「本堂并鎮守社」が、絵図に描かれた建物であることは、絵図の本堂の背後に掟書に触れられている「御廟所」の記載があることからも伺える。そして、この本堂が寺院・上平寺の中心であったことが文書からも明らかである。

また、絵図に描かれた本堂が、明治時代の神仏分離で現在の位置（上平寺館の入口）に降ろしたといわれる地蔵堂（旧本堂）とは比べものにならない大規模なものであることから、地蔵堂は江戸期に建て替えられたものであろう。

その他、寺院を現す記述は「長福寺（舊跡）」のみである。密蔵院などの上平寺の坊舎は、空白で描かれている城下町部分に混在していたのであろうか。逆に、長福寺のみ記載しているのは、当寺が上平寺一山とは別格のものであったと考えることができるのである。ただし、享

禄二年（1529）に「上平」への帰還を認められている長福寺であるが、絵図では「(舊跡)」となっていることから、すでに江戸初期には廃絶していた可能性が考えられる。

さて、上平寺城館廃絶後の天文七年（1538）、京極家の家臣黒田宗清と多賀昌運が連署で上平寺密蔵院に宛てた文書がある（上平寺区有文書）。密蔵院の寺領を安堵するとともに、「可致奉弔瑞山寺殿様御菩提之由」とあり瑞山寺殿（京極高清）の供養を命じている。この他、区有文書の中には、年号不詳ながら堀氏の家老樋口直房が上平寺密蔵院へ宛てた安堵状や、木下秀吉の寺中保護の禁制、天正十九年（1591）に軽庵という人物が諸役免除・山林伐採を禁じたもの。文禄四年（1595）に石田三成の家臣大橋甚右衛門尉が寺領を安堵した文書が残されている。

また、天文五年（1536）の『伊吹大菩薩奉加帳』には、以下の二十八の坊院名が記録されている。

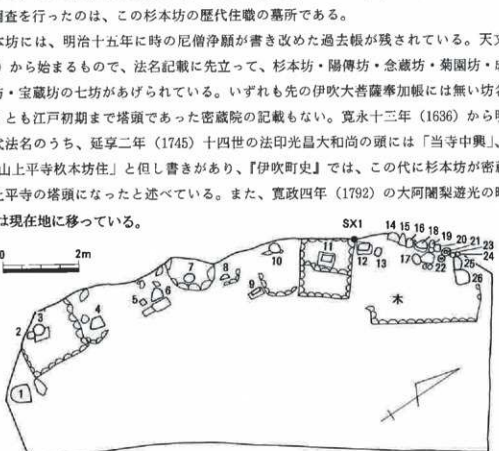
密蔵院　惣持坊　宝泉坊　洞泉坊　東蔵坊　岩本坊　龍光坊　円蔵坊　金乗坊　西之坊
竹林坊　円寿坊　密教坊　花蔵坊　実泉坊　真行坊　定光坊　山本坊　行円坊　行乗坊
養泉坊　竜蔵坊　金蔵坊　宝乗坊　徳蔵坊　乗泉坊　実蔵坊　勝蔵坊

これらの文書からは、上平寺城廃絶後この地が再び、多くの僧侶・行者が住む伊吹山修験の一拠点となっていたことがうかがえるのである。

さらに、先の元和二年（1616）の掟書は、「学侶頭密蔵院目代」に伝えられおり、上平寺が当地方有数の寺院であったとともに、中世以来、密蔵院が上平寺の塔頭であったことがわかる。

しかし、その後は次第に衰退して、今日では杉本坊のみが上平寺の法灯を受け継いでいる。今回調査を行ったのは、この杉本坊の歴代住職の墓所である。

杉本坊には、明治十五年に時の尼僧浄願が書き改めた過去帳が残されている。天文十九年（1550）から始まるもので、法名記載に先立って、杉本坊・陽傳坊・念蔵坊・菊園坊・成泉坊・玉蔵坊・宝蔵坊の七坊があげられている。いずれも先の伊吹大菩薩奉加帳には無い坊名で、すくなくとも江戸初期まで塔頭であった密蔵院の記載もない。寛永十三年（1636）から明治までの歴代法名のうち、延享二年（1745）十四世の法印光昌大和尚の頭には「当寺中興」、脇には「伊吹山上平寺杉本坊住」と但し書きがあり、『伊吹町史』では、この代に杉本坊が密蔵院にかわり上平寺の塔頭になったと述べている。また、寛政四年（1792）の大阿闍梨遊光の時に、杉本坊は現在地に移っている。



第９図　調査前墓石配置状況

第２章　調査の経過

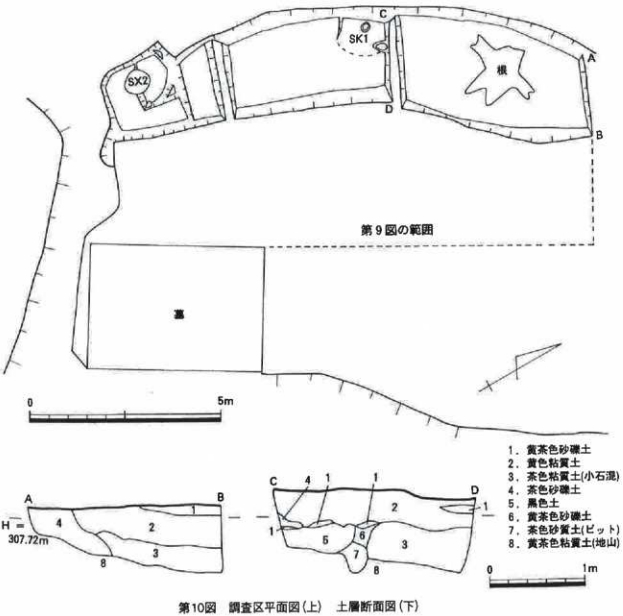
今回の調査は、上平寺区集団墓地の移転工事に伴い実施した。第１部第２章で述べたとおり、新しい集団墓地の候補地に「駒繋跡」が選ばれ、散在する墓地を１箇所に集めるとともに、一段下にある杉本坊墓地も同じ位置にまとめるということで計画立案された。杉本坊墓地は、墓地への進入路にあたることからも、移転を余儀なくされた。

調査は、墓石の記録作成と、地下遺構を確認することを目的におこなった。

現地の道に面した部分はすでに現状が変更されており、平成９年度に県教育委員会が行なった調査では、ピット・土坑が検出されている。

調査面積は約40㎡である。調査は平成12年７月24日から９月７日の期間に実施した。

発掘調査は、人力でおこない遺構検出面直上まで掘り下げたあと、作業員による遺構の検出と遺構内の掘削、遺物の検出をおこない、写真撮影と実測図の作成により記録した。調査終了後、埋め戻しをおこなった。



第10図　調査区平面図(上)　土層断面図(下)

第３章　発掘調査の結果

調査前の墓地の状況は、削平地の山側斜面に沿って墓石が並んでいた。調査は、まず墓地周辺の刈り払い、墓石を埋めている土砂の取り除きなどをおこない、現状を確認した。墓石には、一石五輪塔、自然石に五輪塔を陰刻したもの、板碑型、石仏、卵塔、自然石（墓石でない可能性もあり）と五輪塔・宝篋印塔の残欠などがある。

次に、各墓石の実測図と拓本の作成をおこない、墓石に刻まれている年号や銘等を確認した。肉眼で確認できるものもあるが、拓本により判読できたものも多い。詳細については第４章で報告したい。

さて、これらの墓石については、写真記録及び配置図の作成後、いったん別の場所に移した後に、地下遺構の検出をおこなった。

１）層　序（第10図）

墓石が並んでいた範囲を中心に設定した調査区は、東西約13m、南北約３ｍを測る。

土層は、西側では茶色粘質土が約 20～40㎝堆積し、地山と考えられる黄茶色土層になる。中央及び東側では、茶色粘質土の下に細かい礫を多く含む同色の層が堆積している。また、山側では、砂礫土や黒色土が混じる。

２）遺　構

検出した遺構は、墓石 11（石仏）の石積みに接して検出された SX１と、墓石３（卵塔）に伴うと考えられる SX２のほかに、墓石10（自然石）の直下で検出した土坑 SK１のみである。また、墓石８（舟型板碑）および墓石９（板碑）の周辺には、骨片が散在し寛永通宝が１点出土している。

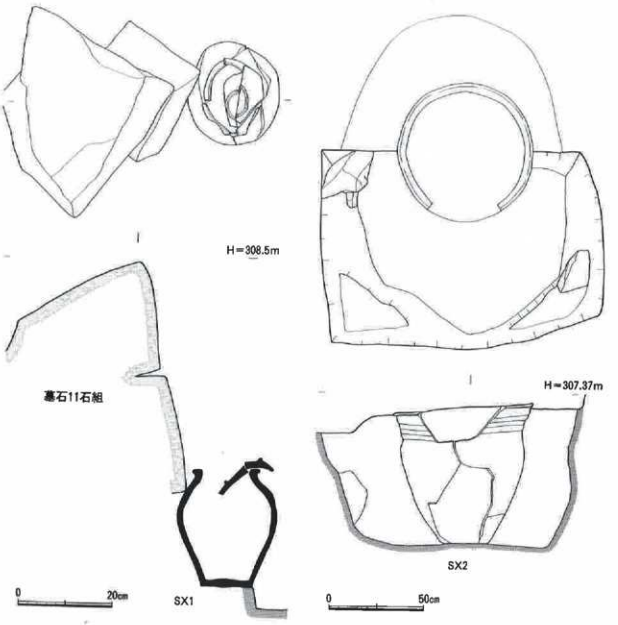
SX１（第11図）

常滑焼の蔵骨器が、墓石 11 の石組の基底部に接して出土した。壷の高さは約 25㎝で、黒色土中に直立して埋められており、掘り方は確認されなかった。肩の部分を石組の底部角に接しており、ここからの深さは約 20㎝を測る。壷には瀬戸焼の皿が蓋として用いられていた。蔵骨器の中の約３分の１には人骨が詰まっていた。また、骨以外の遺物はなかった。

墓石11は、明治29年に濃尾地震で亡くなった杉本坊の尼僧浄顯のものである。石組もこのときに作られたものであろう。出土した蔵骨器と皿は、ともに江戸中期以降のもので、石組の外側に埋められていたことからも尼僧の蔵骨器とは考えにくく、隣接する墓石12（板碑）ともやや離れている。石組に接していることから、これが組まれたときに埋められた可能性が高く、整地の際に出てきたものを改めて埋め戻したか、整地で出てきた骨片を集めて再葬したものと考えられる。

SX２（第11図）

墓石３に伴う埋葬施設で大甕が直立した形で出土した。墓石３は延享三年（1746）没の玄良大和尚のもので、大甕は 18 世紀中頃までに信楽で作られたものである。墓石の石組の下の茶色粘質土を剥ぐと、20㎝大の石が配され、その下層は固く締まった黄色の粘質土が現れた。これは、埋葬した後に墓石の石組を安定させるための整地層であろう。大甕はこの下に埋葬され



第11図　SX1・SX2実測図

ている。直径約115cmの茶色土の掘り方を半裁して確認したところ、甕の周りからは人頭大の石が多くみられた。また、釘や布状の遺物を検出し、甕の底には板状の木片が張り付いていた。埋葬の際、甕は木製容器に入れられたり、布を被せられていた可能性が考えられる。そして、周りの石は安定させるためのものであろう。

甕の中は茶褐色粘質土で、出土遺物には、釘・木片・寛永通宝・石臼と、紙に柿渋を塗ったと考えられる薄いシート状のものが出土した。これは、両面を黒と朱に塗り分けたものである。骨片は検出されなかった。寛永通宝は5・6枚が張り付いて底から出土しており、六道銭と思われる。釘・木片やシート状のものも底部から出土しており、副葬品の残欠かもしれない。石臼は下臼の2分の1で、中間付近から出土しており落ち込んだものと考えられる。

3）遺　物（第12図）

出土遺物には、中世に属すものとして土師皿、天目茶碗片、陶器片があり、近世に属すものが、蔵骨器として用いられた常滑の壷と瀬戸の皿、および信楽の大甕がある。また、これらに伴う古銭・石臼・釘・炭・人骨などがある。

土師皿は、駒繋の遺物と同様に密な胎土をもち、白茶色の色調を呈するものが多い。図化しえた土師皿は27点である。

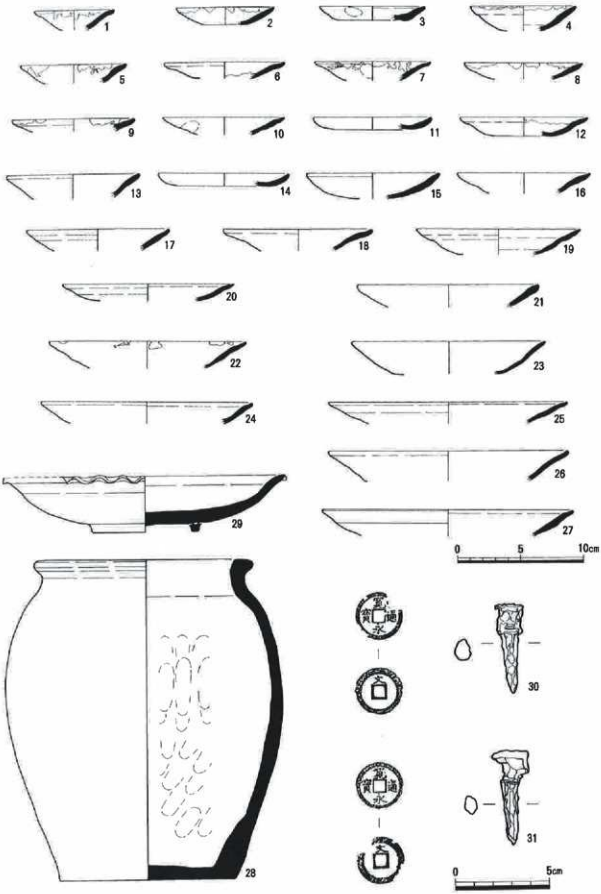
1～5は、口径が6.5～8.4cmの小型品。6～19が9.2～13.0cmの中型品で、10.5cmまでに集中する。20～27は、13.6cm以上の大型品で、19.5cm以上の大型のものが3点ある。1・2・4・5・6・7・8・9・12・22の口縁部にはタールが付着しており、灯明皿として利用されていたと考えられる。11・14は、内弯ぎみに立ち上がる浅い器形をもち、15とともに暗茶灰色を呈する。器形・色調ともに他の土師皿と異なることから、時期の違う遺物の可能性がある。

28は、SX1の壷である。高さ約25.5cm、口縁径約17.3cmを測る。内外面ともに赤茶褐色の色調をし、肩に白茶色の自然釉がかかる。上部で丸く膨らみながら、肩からすぐ口縁になる。口縁端部は外に開く。江戸時代の常滑焼の壷であろう。

29は、瀬戸の皿で、蔵骨器の蓋として利用されていた。高さ約4.5cm、口径約22.6cmで、波状口縁をもち、底部に断面台形の高台が付く。内外ともに緑がかった灰色の釉薬が施されている。江戸時代中期以降に瀬戸で作られたものである。

SX2の大甕内から出土した石臼は、下臼で風化が激しい。伊吹町曲谷産の石臼である。

30・31は、SX2で出土した金属製の釘である。33・34は墓石8周辺で出土した寛永通宝である。



第12図　出土遺物実測図

第4章　墓　　石

墓地を構成する墓石の形態別内訳は、

①自然石に五輪塔を陰刻したもの　6基　　②一石五輪塔　7基　　③板碑型　4基

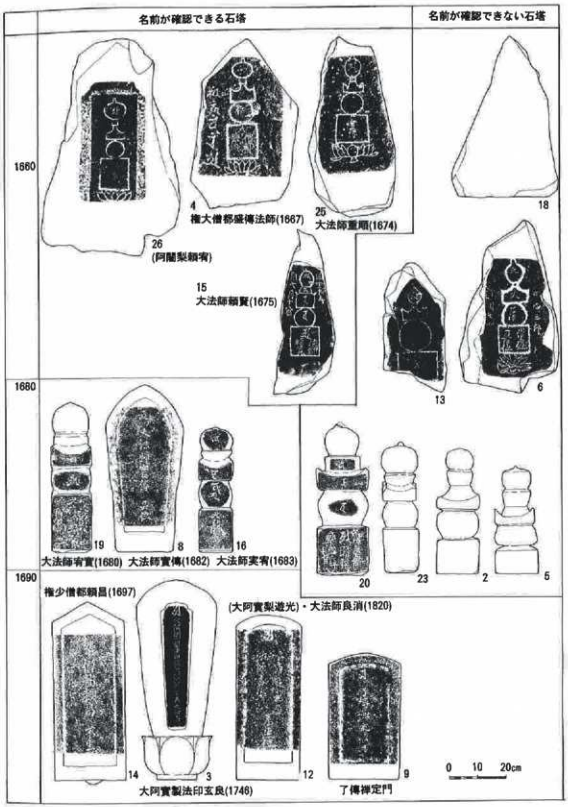
④卵塔　1基　　⑤石仏　1基　　⑥自然石　4基（墓石でない可能性もあり）

⑦五輪塔・宝篋印塔の残欠　3基

であった（第13図および図版参照）。ここでは、明治29年銘の石仏と自然石および残欠を除く19基について検討することで、杉本坊墓地の内容に迫りたい。

①は、高さ約58～76cm、幅約19～50cmで板状のものが多い。共通しているのは、五輪塔および年月日や法名を刻むことができる平坦な1面があることと、三角錘状をしていることである。いずれもこのような自然石を採用して、稚拙な五輪塔を陰刻する。②は、小さいもので高さ約38cm、大きいもので約53cmを測る。砂岩系の石材のほか、19は花崗岩製で伊吹町曲谷産のものに類似し、2と23は凝灰岩製である。梵字や年月日・僧侶の名が刻まれたものが3点ある。③は、高さ約44～64cmで、正面が舟型をしたもの1基、長方形で頭部が三角形のもの1基、頭部を丸めたもの2基である。いずれも名前等の肉眼での判読は可能である。

さて、作成した拓本と明治15年に尼僧浄願が残した過去帳を比べることにより、墓石の被葬者と年号を特定し得たのは12基である。①については、墓石4が寛文七年（1667）没年の「大僧都盛傳」、15が延宝三年（1675）「法師頼賢」、25が延宝二年（1674）「重順」、26が寛永十三年（1636）「頼宥」である。6と13も僧侶名が刻まれているが判読できない。②は、16が天和三年（1683）「大法師実宥」、19が延宝八年（1680）「大法師宥實」で、20は「實海」と読め元禄九年（1696）の「實海」かもしれない。③は、8が天和二年（1682）「大法師實傳」、14が元禄十年（1697）「権少僧都頼昌」、12が寛政四年（1792）「法師遊光」と文政三年（1820）「法師良消」、9が年不詳で「了傳禅定門」である。④の卵塔3は、延享三年（1746）「大阿闍梨法印権大僧都玄良大和尚」である。また、宝篋印塔の残欠と思われるものに「(放) 海」と読めるものがあるが、杉本坊歴代に該当者はいない。



第13図　杉本坊墓地墓石変遷図(番号は図9に対応する)

第５章　まとめにかえて

今回の調査では、京極氏城館群に伴う遺物は出土したものの、調査の主眼は、寺院上平寺の法灯を受け継ぐ杉本坊墓地においた。

改めて、墓石を年代順に並べ替えると、26、４、25、15、19、８、16、20、14、３、12、９となり、これを表したのが第13図である。これをみると、1630～1670年代が①のタイプ、1680年代を中心に②のタイプ、1697年以降が③のタイプが中心であることがわかり、江戸期の一地方寺院である杉本坊の墓石が、自然石に五輪塔を刻むものから一石五輪塔、板碑型へと変遷しているのが見て取れる。

さて、この墓地は当初から現在地にあったのだろうか。発掘調査では、京極氏時代に当たる16世紀の遺物も出土していることから、「駒繋」が造成された時期にこの削平地も作られたと考えられる。今回の墓石の中で、確実にこの場所に造営された可能性があるのは、埋葬施設を伴う延享三年（1746）の卵塔である。しかし、他の墓石は時代順ではなく混在して建てられていることや、歴代すべてが揃っていないこと、逆に歴代にはみられない宝篋印塔残欠があること、14の板碑の底部には台座にはめ込む突起があるが、台座がみられないことなどを考えると、ある時期にこの場所に集められたものと考えられる。明治29年の石仏が墓地の中央に安置されていることから、このときに、卵塔がすでに建てられていたこの地に一括されたのではないだろうか。堀底道を挟んだ南側に、延享二年（1745）没年の「當寺中興贈法印大阿闍梨光昌大和尚」の墓石があり、往事は、墓石が周辺に分散していた可能性が考えられる。そう考えると、歴代全てがそろっていない理由も成り立つのである。

いずれにしても、埋葬施設SX２の検出や、墓石の変遷など、近世寺院墓地として貴重な資料が得られた。

図　　版

調査地

調査前

作業風景

調査区全景

T 1

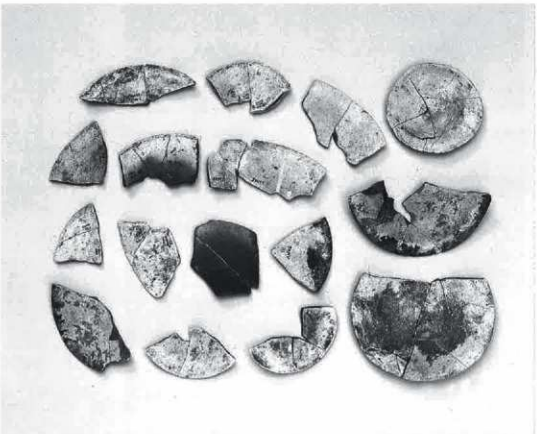
T 2

Ｔ３

Ｔ１　南端土層断面

Ｔ２　南端土層断面図

土器集積遺構



出土遺物

杉本坊墓地図版

調査前

調査前（刈り払い後：右側）

調査前（刈り払い後：左側）

S X 1

S X 2

S X 2

墓石（2・3）

墓石（10～14）

墓石（12～26）

報告書抄録

ふりがな	じょうへいじじょうあといせきぐん　こまつなぎあと・すぎもとぼうぼち
書名	上平寺城跡遺跡群　駒繋跡・杉本坊墓地 発掘調査報告書
シリーズ名	伊吹町文化財調査報告書
シリーズ番号	第16集
編著者名	高橋順之
編集機関	伊吹町教育委員会
所在地	滋賀県坂田郡伊吹町春照37
発行年月日	平成14年3月

所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査面積 ㎡	調査機関	調査原因
高殿地区 (上平寺南館遺跡)	坂田郡伊吹町 大字上平寺 字西平	25496	46-045	35度 22分 55秒	136度 25分 10秒	180	990,000 ～ 000,000	集団墓地 移転工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
駒繋跡	城館跡	戦国時代	—	土師皿	
杉本坊墓地	墓地	江戸時代	埋葬施設	土師皿・近世陶器・釘・石臼	

伊吹町文化財調査報告書第16集
上平寺城跡遺跡群
駒繋跡・杉本坊墓地
2002年3月
編集・発行　伊吹町教育委員会
滋賀県坂田郡伊吹町春照37番地
TEL　0749-58-1121
印刷　立木印刷